



TITLE:

戦後英吉利の経済状態

AUTHOR(S):

小島, 昌太郎

CITATION:

小島, 昌太郎. 戦後英吉利の経済状態. 経済論叢 1921, 13(3): 431-449

ISSUE DATE:

1921-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127816>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷三十第

行發日一月九年十正大

論叢

給付能力原則の適用

法學博士 神戸 正雄

農業勞働問題

法學博士 河田 嗣郎

中世都市の發達

文學博士 三浦 周行

時論

我國の地方税を論ず

法學博士 小川郷太郎

說苑

八時間勞働制の沿革

法學博士 山本美越乃

小學教育費の研究

經濟學士 小山田小七

井リヤム・タムスンの分配論

經濟學士 堀 經夫

雜錄

住居統計概説

法學博士 財部 靜治

伯林に於ける乳兒死亡率

法學士 汐見 三郎

戰後英吉利の經濟狀態

法學士 小島昌太郎

日英米の海軍協定

法學士 小島昌太郎

戦後英吉利の經濟狀態

The Industrial Situation in Great Britain: From the Armistice to the Beginning of 1921, By Herbert Feis.
の抄譯*

小島昌太郎

世界大戰は英吉利の有せる經濟上の力、軍事上の力のあらゆるものを要求した。一九一八年十一月に戦争が終つて後も、政府は間斷なき政治上の難問題に執掌せなければならなかつた。就中、その中の一つなる愛蘭土問題は最も重大なる性質のものであつた。戦後産業上の問題に至つても、それは只、戦時生産より平時生産へ産業組織を變更すると云ふだけの簡單なものではない。大軍隊は之を産業生活へ復歸せしめねばならぬ。息づく間もなく、多くの主要産業にありては、團體的勞働者の新生産狀態を要求し、新

統括力の樹立を求むるに對して、その要求の明かに具體化したるを認め、之に満足を與ふる方法を講せねばならなくなつた。同盟罷工に至つては、重大なるものが少くとも三つあつた。鐵道、炭礦、製鋼等の同盟罷工がそれである。

大多數の産業は常に海外への販賣を目的として非常に豊富なる生産をして居つたのであるがその大部分は經濟的に破壊せられ紛争しつゝある有様である。工業原料の供給も、そのあるものは事實上閉鎖せられて居る。露西亞よりの供給の如き即ちそれである。戰前最も有利の販路たりし地も、今や購買力を失つたものが少くない。獨逸の如きその一例である。相場の変動の大なることは貿易を異常に危険ならしめ、爲替の變動も亦之と共に不安と危険とを増大せしめて居る。併し此等は英吉利の産業と英吉利の財政とが處理すべき問題の只一部である。現在はいくくの如き多數の難問題の錯綜の下にある。

休戦後の生産狀態

休戦以來の英吉利の産業狀態を概観するには

生産の數字について戰前と戰後とを比較して見るが最も捷徑である。

先づ農業について、戰時中その自給が最も高調せられたることによりて、幾許の永久的變化が齎らされたか、を觀察してみやう。

農業には何等の急進的變化のなかつたのは明かである。小麥作耕地面積は、保障價格制によりて幾分の増加を來して居る。併しそれも一九一八年以來減少し始めたから、戰前より一九二二エーカ以上に増加することはないであらう。英吉利の經濟政策は依然食料輸入の方針にて樹てらるゝであらう。

英吉利の麵粉生産及び輸入統計

(單位一千ハンドレッドウェイト)

| 年次 | 生産 | 輸入 | 合計 |
|------|-------|-------|-------|
| 一九一三 | 二,700 | 一,300 | 四,000 |
| 一九一四 | 二,900 | 一,400 | 四,300 |
| 一九一五 | 二,700 | 一,300 | 四,000 |
| 一九一六 | 二,800 | 一,400 | 四,200 |
| 一九一七 | 二,900 | 一,500 | 四,400 |
| 一九一八 | 二,800 | 一,400 | 四,200 |
| 一九一九 | 二,700 | 一,300 | 四,000 |
| 一九二〇 | 二,600 | 一,200 | 三,800 |
| 一九二一 | 二,500 | 一,100 | 三,600 |
| 一九二二 | 二,400 | 一,000 | 三,400 |

1916 1917 1918 1919

石炭

英吉利の石炭供給が、彼國産業の柱石たることは、經濟史上に周知の事柄である。炭礦は英吉利に於ては、單に工業の原動力、海軍の燃料を供給するに止まらず、石炭は實に彼國にとりては非常に貴重なる輸出貨物なのである。されば石炭生産量に關する統計は看過し得ざる所である。

石炭の生産及び輸出(單位百萬噸)

| 年次 | 生産 | 外國船供給 | 輸出 | 内國殘量 |
|------|----|-------|----|------|
| 一九一六 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九一七 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九一八 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九一九 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二〇 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二一 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二二 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二三 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二四 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二五 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二六 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二七 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二八 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九二九 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |
| 一九三〇 | 二六 | 三 | 三 | 一九三 |

本年(一九二二年)最初の十週間の生産量は一九二〇年の平均以上に達して居ない。生産量は戦前に比し非常に減退して居る。それは次の表に

よれば、層明かに分る。

石炭生産量(坑夫一人當り平均)

| 年次 | 一九一六 | 一九一七 | 一九一八 | 一九一九 | 一九二〇 |
|----|------|------|------|------|------|
| 噸 | 二六 | 二六 | 二六 | 二六 | 二六 |

石炭生産量が、かくの如く減退したる原因については、種々なる説がある。すつと以前の生産量と比べて見ると、近頃の減量は、行動の自由なる炭層や、地表に近き部分の石炭が、採掘し盡されたことが、少なからざる原因をなして居る。炭坑裝置の惡くなつたこと、特に一九一四年以來の廢頓、並びに石炭輸送機關の能力減退も亦その主因たるものである。一九一二年及び一九一九年の兩度に、勞働時間が短縮せられたことも、幾分の原因をなしてゐる。最近二三年間に於ける坑夫の氣質の變化も、疑ひもなく主要の原因をなす。彼等の大多數は、何等かの形式に於ける國有を希望してゐる。彼等は出來得る限り現在の炭礦利潤を減少せんことを望んでゐる。他方に於て、彼等は又勞働者達が、炭價を維持せんが爲めに、専ら生産の減少をなさん

* 炭礦夫罷業の損失は千四百萬噸と推算せらる

ことを要求してゐる。坑夫と政府との間に、若干の協定が成立して、生産量の増加が利潤の増加を伴ふものに非ざることを保障する政策が設けられて彼等を満足せしめ得るまでは、採炭量の増加は望み得ないであらう。將來更に同盟罷業が起らないことは、今日に於ては未だ保障することが出来ない。全生産量の減少は、更に大なる割合にて輸出の減少を齎らした。但し輸出價格は一九一三年よりも一九二〇年の方が上である。主要諸國に對する石炭輸出の減退は次の如くである。

石炭輸出の減退(單位一千噸)

| 國名 | 一九一三年 | 一九二〇年 |
|-----|-------|-------|
| 露西亞 | 五、九八八 | 三 |
| 瑞典 | 四、五三三 | 一、四二一 |
| 獨逸 | 八、九三三 | 三 |
| 佛蘭西 | 一、三七八 | 二、九六一 |
| 伊太利 | 五、六四七 | 二、九三五 |
| 南米 | 五、八三三 | 五、六 |

鋼及び鐵

總ての交戰國に於けると同様に、鋼及び鐵の

生産工場は、戰時中擴張せられ改良せられた。戰後の生産量を一九一三年と比較すれば、次の如くである。

英吉利戰後の鋼及び鐵の生産(單位千噸)

| 年次 | 銑鐵 | 鋼錠及び鑄鋼 |
|------|--------|--------|
| 一九一三 | 一〇、八六〇 | 七、六六四 |
| 一九一八 | 九、八八六 | 九、五三〇 |
| 一九一九 | 七、八八八 | 七、八九四 |
| 一九二〇 | 八、〇〇〇 | 九、〇三三 |

一九一三年は鋼及び鐵の生産に於てはレュードの年であつたのである。休戰後の狀態は各期の平均生産量を見れば一層明かである。

鋼及び鐵の各期平均生産量(單位千噸)

| 年次 | 銑鐵 | 鋼 |
|-------|-----|-----|
| 一九一九年 | | |
| 第一期 | 六、九 | 七、七 |
| 第二期 | 六、六 | 六、八 |
| 第三期 | 五、一 | 六、〇 |
| 第四期 | 五、六 | 六、七 |
| 一九二〇年 | | |
| 第一期 | 六、七 | 七、六 |
| 第二期 | 七、三 | 八、二 |
| 第三期 | 七、四 | 七、九 |
| 第四期 | 五、七 | 五、八 |

一九二〇年の鋼生産は戦前よりも増加してゐる。同年五月の銑鐵生産七五二噸、九月の鋼生産八八四噸は斯業に於けるレコードである。併し乍ら、斯業の前途は容易に樂觀を許さないものがある。十月及び十一月の生産減退は、一部は一般不景氣の影響により、一部は坑夫同盟罷工の結果である。一九二一年二月は最も甚だしき減退を示し、戦後に於ける最低量であつた。戦前に於ては製鋼製鐵業の利潤は屢々平均七割に達した、今日に於てはそれ程の利潤はないが、それは必ずしも、斯業が衰退した證據ではない。今日斯業の生産能力は一九一三年のそれよりも大きくなつてゐる。

鋼及び鐵使用工業

機械工業に就ては何れも、生産統計の據るべきものはない。概して言へば一九二〇年の輸出量は一九一三年よりも劣つてゐるのは確だ。一九二〇年には時間給の問題が激しく論争せられた。鋼及び鐵の製品輸出の統計は次の如くである。(單位千噸)

| 年次 | 鋼及び鐵製品 | 機械 | 機關車 |
|------|--------|------|-----|
| 一九一三 | 五,000 | 七,七〇 | 六 |
| 一九二〇 | 三,一五〇 | 四,一六 | 元 |

造船業に就いては、もつと完全なる統計が利用し得らる。英吉利の世界造船界に於ける優越の地位は以前の如くではないが、一九二〇年に於ける英吉利の新造船噸數は、戦前よりも増加して居る。一九一三年には、英吉利は世界商船の五八%を産出して居つたが、一九一九年には只二二・七%となり、一九二〇年には三五%である。

造船の増加は一九二〇年の第四期に至つて停止し、同時に新造船の噸數も低下し始めた。世界商船噸數は一九二〇年末に於て、一九一三年よりも八百萬噸増加して居る、と推定されて居る。此事實は、取りも直さず、近き將來に於て造船界が如何になるかを、確實に推定すること不可能ならしむるものである。海運界の現状は沈滞の裡に在るから、一九二一年の造船高は一九二〇年よりも遙に低下するであらう。

商船進水噸數

| | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|
| 一九二三年 | 一九二四年 | 一九二八年 | 一九二九年 | 一九三〇年 |
| 1,200 千噸 | 1,210 千噸 | 1,235 千噸 | 1,265 千噸 | 1,005 千噸 |

造船中の商船噸數(單位千噸)

| 年 月 | 造船中 | 造船者手 |
|-------|-------|------|
| 一九二三年 | 2,000 | |
| 一九二四年 | 1,733 | |
| 一九二八年 | 1,850 | |
| 一九二九年 | 1,805 | |
| 一九三〇年 | 1,605 | |
| 同 一 | 2,000 | 507 |
| 同 二 | 2,235 | 200 |
| 同 三 | 2,265 | 250 |
| 同 四 | 2,265 | 250 |
| 同 五 | 2,265 | 250 |
| 同 六 | 2,265 | 250 |
| 同 七 | 2,265 | 250 |
| 同 八 | 2,265 | 250 |
| 同 九 | 2,265 | 250 |
| 同 一〇 | 2,265 | 250 |
| 同 一 | 2,265 | 250 |

織物工業

織物工業は、製靴被服工業と共に、不景氣の影響を最も著しく受けた。棉絲工業に於ては、製絲聯合會の投票の結果、埃及部に於ては一週三日に、亞米利加部に於ては一週四日に操業を短縮することを實行した。勿論、棉絲工業は戰時中は甚だ多忙であつた。原棉價格の下落、極

東爲替の暴落は、その輸出に決定的の打撃を與へ、一九二〇年末に至る迄は織機の半數は休止の状態であつた。而して解雇は甚だ盛に行はれた。併し、一九二〇年は全體としては、一九一八年及び一九一九年よりも非常なる輸出の増加を見たのである。

棉製品及び棉絲の輸出(000省曼)

| 年次 | 棉製品 | 棉絲 |
|-------|-------------|--------------|
| 一九一四年 | 4,034,441 磅 | 21,002,147 磅 |
| 一九一五年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九一六年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九一七年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九一八年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九一九年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二〇年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二一年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二二年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二三年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二四年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二五年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二六年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二七年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二八年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九二九年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |
| 一九三〇年 | 4,511,220 磅 | 23,612,547 磅 |

一九二〇年に於て棉製品工業の輸出は、價格に於て、英吉利全輸出高の二六%を占めて居つた。合衆國への輸出は、斯業始まつて以來最大の額に達したのである。併し極東への輸出は戰前より遙に下つて居る。

毛織工業にありては、一九二〇年末は最も不景氣であつて、非常なる決損を表はした。原毛の價格は參月の半額以下に下つた。併しこの價格下落は一九二一年の注文の増加を齎らすと期

待せられた。

毛織物及び毛絲の輸出

| 年次 | 羊毛織物 | 毛絲織物 | 羊毛、毛絲、アルパカ、モヘア絲 |
|------|---------------|--------------|-----------------|
| 1911 | 105,800 百兩 | 62,500 百兩 | 62,500 百兩 |
| 1912 | 103,100 百兩 | 53,700 百兩 | 53,700 百兩 |
| 1913 | 107,200 百兩 | 57,500 百兩 | 57,500 百兩 |

一九二〇年の毛織物輸出金額は一九一三年の五倍であつた。戦前に於ては、大陸特に獨逸は毛絲の主要なる顧客であつた。目下輸出量の減退は主としてそれが爲めである。

雜工業

主要諸國に對する雜工業品の輸出は次の如くである。

| 年次 | 陶磁器 | 靴 | セメント |
|------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1911 | 1,000,000 千圓 | 1,000,000 千圓 | 1,000,000 千圓 |
| 1912 | 1,000,000 千圓 | 1,000,000 千圓 | 1,000,000 千圓 |
| 1913 | 1,000,000 千圓 | 1,000,000 千圓 | 1,000,000 千圓 |

以上取扱ひたる各種工業の生産統計を基礎として、輸出統計も同様の傾向を顯はして居るのだが——未だ十分正確なる概括的説明を

雜錄 戦後英吉利經濟の状態

下すことは出来ない。此等の工業——就中、鋼及び鐵工業、造船業、織物業——は景氣も最も好く、戦争の打撃の恢復も早かつた。併し一九二〇年末に起りたる不景氣によりてやはり影響せられ、今まだそれが續いて居る。その原因は大陸諸國の繼續したる産業不安と、極東爲替の下落とに因る所が多い。併し英吉利の不景氣は英日米其他諸國に、殆ど同時に企てられたる通貨收縮と産業秩序恢復とが始まりたることの反應と見るべきである。英吉利の産業にとりて、反動は鋭くはあつたが併し確に有利の状態を呈して居る。原料及び食料の代價が下落すれば、生産費の低下を來し、且つ政情が安定を得るに至らば購買力を増加するに違ひない。對露貿易に對する公の障礙も今や次第に解除せられんとしつつある。他方に於て、英吉利工業は將來、佛獨方面に於ける世界的市場に於て、現在よりも激烈なる競争を豫想せねばならぬ。

一九二〇年の初めに在りては、英吉利の生産機關は未だ全活動を開始するに至らなかつたが

その生産能力は決して一九一三年に劣つて來た譯ではない。但し生産量は一九一三年に比べては、大體低下して居る。或方面では、それは一般的生産力が永久的に低下した證據だと言ふものがある。探炭業に於てはそう云ふ様な状態になつて居ることは既に述べた。カレドニアン鐵道會社の總支配人の説によると、一九二〇年の輸送量(三三〇百萬噸)は一九一三年の輸送量(三六七百萬噸)に劣つて居るが、従業員は却つて三〇%多く必要になつた、このことである。ウィリアム卿も機械工業に於ける生産額が制限せられたることを力強く聲明して居る。

一般的生産力減退の原因を明かに説明することは、縱ひ其減退が著しく目立つ場合にありても、不可能である。——最近の生産低下の原因としては、販路の梗塞も重要なものである。鐵道の沈滞も屢々聞く所である。不景氣の爲めに故ら就業時間を短縮したのも亦少からずある。

一九一三年以來多數の工業に於ては勞働時間

の短縮が行はれた。併し其結果如何は未だ不明である。價格及び生産の調節に關する聯合及び協定は成立して、今や確實に實行せられつゝある。生産事業に關する勞働者の態度は遂に重要なものとなつた。雇傭及び工業管理に關する問題、並びに政治問題に至るまで、その色調を帶ぶるに至つた。多數の勞働者は、現に彼等が働きつゝある制度より遠けられた。併し勞働組合の聯合は産業の恢復に對して主要なる役目をなすこととなるであらう、妥協の餘地が次第に發見せられつゝあるから。勞働狀態に關しては更に後に詳述するであらう。

輸出入及び貿易差額

以上生産の状況を述べたれば以下進んで貿易状況を説明することとする。先づ戦前との投下資本の比較をせんに、新投下資本額は、ロンドン・デヴォイント・シチ・エンド・ミッドランド銀行の公表する所によれば次の如くである。

資本投下統計(單位千鎊)

と、並びに輸入超過の減少しつつあることは、注目すべき事情である。現在は、周圍の狀況の甚だ困難なりし一九一八年に比して、大に改善せられたと言ふべきである。但し一九一八年以來の物價變動は考慮に入るべきである。次の表は一九一三年の戦前價格にて、一九二〇年の貿易を表示したものであるから、現狀を知るには更に適切である。

一九一三年の價格にて表示したる一九二〇年の貿易(單位百萬磅)

| 品 目 | 純輸入 | | 英品輸出 | |
|-----------------|-------|-------|-------|-------|
| | 一九一三年 | 一九二〇年 | 一九一三年 | 一九二〇年 |
| (一) 食料品、飲料品、煙草等 | 二六 | 三四 | 四三 | 一九 |
| (二) 原料 | 二〇 | 一五 | 六 | 三 |
| その中 | | | | |
| (い) 石 炭 | 一 | 一 | 五 | 七 |
| (ろ) 原 棉 | 六 | 五 | 一 | 一 |
| (は) 鐵以外の原鐵 | 三 | 八 | 一 | 一 |
| (三) 製 品 | 一五 | 二四 | 四四 | 三六 |
| その中 | | | | |
| (い) 鐵、鋼、及び其製品 | 一六 | 七 | 五 | 四〇 |
| (ろ) 鐵以外の金屬及び其製品 | 二 | 一 | 一 | 一 |

| | | | | |
|-------------|----|----|----|----|
| (は) 金物及び刃物 | 五 | 三 | 七 | 五 |
| (に) 機 械 | 六 | 六 | 三 | 三 |
| (は) 棉絲及び棉製品 | 七 | 一 | 二六 | 七 |
| (へ) 毛絲及び其製品 | 九 | 四 | 六 | 四 |
| (こ) 運搬用具 | 五 | 三 | 六 | 三 |
| 總 計 | 五〇 | 五〇 | 五四 | 五七 |

此統計によれば、一九一三年の價格に換算すれば、一九二〇年に於ては一九一三年に比べて純輸入は一二%、英品の輸出は三六%、何れも減少して居る。一九二二年の初めの二ヶ月間の貿易は、不景氣の繼續及び擴大の結果、一九二〇年に比べて更に沈滞の狀を呈した。只今迄の狀態に於ては一九一三年の狀態を恢復するの徴候は未だ顯はれて居ない。石炭輸出の事情に變化を來したことは、その主たる原因である。

休戦以來對外貿易に於ては、戦前の販路を恢復せんとしつつある傾向がある。併しそれを恢復するには非常な故障のあるのも事實である。露西亞や、獨逸や、又其同盟國を除いては、近接の市場は、一九一三年よりも英吉利輸出品を多く需要して居る。併し乍ら、此等地方への輸出

割合は他の地方に比べては次第に低下しつつある。次表はその大勢を明かならしむるに足るであらう。

各市場に對する輸出割合

| | 一九一三年 | | 一九一九年 | | 一九二〇年 | |
|-------------|-------|-----|-------|------|-------|------|
| | 第三期 | 第四期 | 第一期 | 第二期 | 第三期 | 第四期 |
| 中部及び西部歐羅巴 | 九・七 | 二・五 | 一八・一 | 一六・一 | 一三・五 | 一三・五 |
| 中立國 | 八・六 | 三・〇 | 二・五 | 一・八 | 二・〇 | 二・〇 |
| 歐羅巴 | 二・二 | 六・五 | 二・五 | 三・八 | 一七・四 | 一七・四 |
| 聯合國（露西亞を除く） | 五・七 | 八・三 | 二・九 | 九・九 | 九・四 | 九・四 |
| 露西亞及び南部歐羅巴 | 一四・二 | 八・六 | 一〇・七 | 一二・四 | 一四・五 | 一四・五 |
| 印度及び錫蘭 | 九・七 | 七・一 | 八・三 | 七・七 | 一〇・七 | 一〇・七 |
| 極東 | 八・七 | 三・八 | 三・八 | 四・五 | 六・四 | 六・四 |
| 濠洲及び其附近 | 七・〇 | 四・五 | 五・〇 | 六・四 | 六・九 | 六・九 |
| 亞弗利加 | 五・六 | 四・九 | 五・一 | 七・一 | 六・二 | 六・二 |
| 合衆國 | 二・三 | 六・六 | 六・五 | 七・五 | 八・四 | 八・四 |
| 南米 | 二・三 | 六・六 | 六・五 | 七・五 | 八・四 | 八・四 |

現在に於ける顯著なる一事象は、合衆國より購買することの甚だ多くして、賣込むことの甚だ少きことである。獨逸との貿易は極めて除々に恢復しつつある。露西亞とは全く杜絶して居る。

一九二〇年に於ける英吉利對外貿易の差額は

雜錄 戰後英吉利の經濟狀態

正確に之を表示することが出来る。貨物の輸入超過は三億七千八百萬磅である。其他の項目に關する官憲の計數は、次の如くである。

| | |
|--------------|--------|
| 貨幣及び地金銀の輸出超過 | 四三・四萬磅 |
| 對外投資の純所得 | 一三〇 |
| 海運收入 | 三〇〇 |
| 銀行保險其他 | 四〇 |

貨物輸入超過……………三六

總差額……………一六五

英吉利は合衆國よりの負債に對しては未だ何等の利子を支拂はず、又その對外貸附に就いて未だ何等受領する所がない。一九二〇年は一九一三年以來、貿易差額が有利となつた最初の年である。

對外爲替

對外貿易に就いて上述の如き事實を説明すれば、對外爲替に關しては更に多くを述ぶるの必要はない。弗磅爲替率は依然として居る。それは常に英吉利の事情を反映して居るのみならず、歐洲大陸全般の事情を反對に表はして居る。磅

に於ける割引歩合は、一九二〇年十一月に最高點（三三％）に達した。併し二年の二月には二％に下つた。中立國との爲替歩合は、不規則なる變動を見せたが、多少英吉利に有利である。歐洲の聯合國及び敵國の貨幣は、英貨の換算に於ては下落した。次表は爲替狀態を表示するものである。

磅に換算せらるゝ外國貨幣

| 國名 | 平 | 價 | 一九一八年 七月一日 | 一九一九年 七月一日 | 一九二〇年 八月一日 | 一九二一年 二月一日 |
|-------------|-----|-----|---------------|---------------|---------------|---------------|
| (一) 中立國 | | | | | | |
| アムステルダム F. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| マドリッド p. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| ベルン s. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| クリスチアニア K. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| ストックホルム K. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| コペンハーゲン K. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| アエノス d. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| アイレス s. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| (二) 聯合側及び敵側 | | | | | | |
| フランス fr. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| イタリ l. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| ベルギー fr. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| アゼンス ch. | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |

第十三卷 (第三號 一四八) 四四二

| | | | | | | |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| ドイツ | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| グイエナ | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| (三) 極東 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| マドラス | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 横濱 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 財政 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |

本論文の目的内に於ては、英吉利の財政を適當に記述することは不可能である。併し、産業狀態を測定するには、或範圍迄、財政の狀態を一瞥して置く必要がある。少くとも歳入と歳出とは看過出来ない。

一九一九——二〇年の歳入歳出は次の如くである。

| | | | | | | |
|------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 歳入 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 歳出 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 不足 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 一九二〇——二一年は | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 歳入 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 歳出 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 推定殘 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |

右の計數に就いては、多少の説明が必要である。先づ右の歳入には三億一千一百萬磅の特別

* 英貨に換算せる價格

收入例へば聯合國への政府供給品の代價が含まれて居り、第二に歳出には三億四千五百萬磅の國債支拂が含まれて居り、第三に右の計數は今日迄の所適當に確定せられて居ることである。一九二〇年四月一日より二一年三月十九日に至る年度會計の概要は次の如くである。

| | | | | | |
|------|------|-----|-----|------|-----|
| 總支出 | 1062 | 百萬磅 | 收入 | 1100 | 百萬磅 |
| 十二月殘 | 4 | | 再支出 | 115 | |
| 計 | 1062 | | 計 | 1085 | |

一九二〇年に至つて一九一三年以來初めて歳入と歳出とが適合するに至つた。國債總額は一九一四年八月一日七億一千一百萬磅であつたが一九一九年十二月には八十億七千九百萬磅に増加した。其後二億磅程の償却が出来て、一九二一年一月十五日は七十八億一千七百萬磅となつた。併し流動公債は尙増加を續けて居る。休戰當時それは十四億六千四百萬磅であつたが、其後一時、十二億七千九百萬磅に下り、一九二一年一月十五日には又十五億七千萬磅となつた。

英吉利も縦ひ小規模ながら國債減却方法を備へねばならぬ狀態となつた。従つて當然租稅重課の繼續は免れまい。外國債の利率問題は今尙未定の儘である。一九二二年以後になれば、歳出の減少が期待せられて居るが、併し豫見し得ざる要求は常に國費の増額を齎す傾向がある。

通貨收縮の問題は主に政府紙幣 (Currency notes) の發行を中心として論せられて居つた。一八四四年の銀行條例は戰時中も停止せられなかつた。併し通貨は一九一四年の「政府紙幣及び銀行券條例」に基づく政府紙幣及び發行證券 (Certificates) の發行によりて膨張した。此新形式の通貨 (政府紙幣) は一磅と十志の名稱のものである。其發行額は英蘭銀行の貸借對照表上に、英蘭銀行券と同様に表示せられて居る。それは又他の銀行の支拂準備として計算せられ社債及び小切手の増加を齎らした。國庫は此種通貨に對する特別準備金として二千八百五十萬磅の金を保有して居る。銀行券、政府紙幣、發行證券の流通額は次の如し。

| | | | | | |
|---------|----|----|----|----|----|
| 英蘭銀行券 | 元三 | 元六 | 元九 | 元三 | 元三 |
| 政府紙幣及公發 | 元六 | 元二 | 元七 | 元一 | 元八 |
| 行證券 | 元三 | 元三 | 元五 | 元五 | 元五 |

昨年中は政府紙幣の増加はなかつた。

通貨收縮に關する政策は、それが産業の生産力に直接關係あるが爲め、周到なる注意を以て立てなければならぬ。その第一歩たる歳入出の適合及び國債募集の打切りは、實行せられて成功した様である。併し財政の均衡は、内政外交の問題が財政に大なる負擔を課することなき方法によりて解決せられて、初めて維持し得る所である。物價は漸く下落し始めた。かくて持續的財政案も確立し得るであらう。併し政治上經濟上重大なる事實によりて、現在の不景氣が更に甚だしきを加ふることあらば、それも六かしいこととなる。昨秋デヴィス教授が公にしたる意見は、今尙適當なる見解たるを失はない。教授曰く、「全般より見れば、英吉利は信用と通貨の膨張を制限するに於ても、公債を償却するに於ても、成功を收むるに適當なる收縮政策を立つ

るに都合よき状態にあるものと云ひ得る、併し事態は今尙重大なる危機を脱してゐない、」と。^{*}

物價

卸賣物價の變動は次の如くであつた。* *

| 月 | 穀物及 肉類 | 其他の 食物 | 織物 | 鑲物 | 其他 各種 | 平均 |
|---------|-----------|-----------|-----|-----|----------|-----|
| 元月 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 二月 | 100 | 100 | 81 | 82 | 83 | 81 |
| 三月 | 100 | 100 | 104 | 116 | 84 | 100 |
| 四月 | 100 | 100 | 104 | 116 | 84 | 100 |
| 五月 | 114 | 116 | 111 | 116 | 110 | 110 |
| 六月 | 117 | 116 | 116 | 116 | 110 | 110 |
| 七月 | 115 | 111 | 108 | 116 | 110 | 108 |
| 八月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 九月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 十月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 十一月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 十二月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 一九二一年一月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 二月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 三月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 四月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 五月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 六月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 七月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 八月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 九月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十一月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十二月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 一九二二年一月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 二月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 三月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 四月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 五月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 六月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 七月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 八月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 九月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十一月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十二月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 一九二三年一月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 二月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 三月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 四月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 五月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 六月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 七月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 八月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 九月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十一月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 同 十二月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |
| 一九二四年一月 | 108 | 104 | 104 | 116 | 110 | 108 |

* *The Review of Economic Statistics*, August, 1920, p. 229.

** *The Economist* index number.

同 三月……………一四一

卸賣代價の指數は一九二〇年五月以來明かに下落の傾向を示した。特に織物と食料とに於いて著しい。賃金收得者が最も利害關係を感じる生活費は、一九二〇年十一月迄は昂騰の徑路を辿り、爾後下降し始めた。

勞働事情

産業恢復の經過は、今や注目の中心となりつゝある所の勞働問題の解決如何によりて、著しく影響せらるゝであらう。休戦後一九二〇年の秋に至るまでは、雇傭狀態は安定を得て居つた。賃金も一般的には生活費の騰貴と歩調を共にして居つた。併し、三つの重大なる同盟罷工が休戦後に起つた。賃金問題に就いて起りたる鐵道従事員の罷工と製鋼業勞働者の罷工、及び探炭業に於ける利潤の私有に反對して起りたる坑夫の罷工とが、それである。失職の問題は今や一世の視聽を惹くに至つた。不景氣の加はると共に、解雇に對する反對は喧しくなつた。組織的産業に於ける失職にして、官憲に報告せられたる

數は次の如き割合であつて、之れは従事者總數凡を百五十萬人程に當嵌まるべきものである。

失職統計

| 年月 | 失職歩合 | 年月 | 失職歩合 |
|-----------|------|-----------|------|
| 一九一三…………… | 二・一 | 一九二一…………… | 二・九 |
| 一九一四…………… | 二・三 | 同…………… | 二・一 |
| 一九一五…………… | 二・一 | 同…………… | 二・二 |
| 一九一六…………… | 〇・四 | 同…………… | 二・三 |
| 一九一七…………… | 〇・六 | 同…………… | 二・七 |
| 一九一八…………… | 〇・八 | 同…………… | 六・〇 |
| 一九一九…………… | 二・四 | 一九二一…………… | 六・九 |
| 同…………… | 二・二 | 同…………… | 八・五 |
| 同…………… | 一・六 | ※探炭業を含まず | |

此外、最近の數ヶ月には、就業時間短縮が廣く行はるゝに至つたことが著しい特徴である。一九二一年二月には、失職の數最も大にして、一九〇八——〇九年以來に於ける最大のものである。新に制定せられたる失職保險法は保險界に非常に廣く行はるゝに至つた。該法の適用を受けるもの、推算によれば、一千二百萬人に及ぶと云ふ。男工に對する週給は十五志（戦前の六志の價）に上つた。「失職に關する勞働報告」

(Labor Report on Unemployment) は、有配偶者には四〇志、獨身者には二五志を要求して居る。失職は社會全般の禍患たるに至り、而も尙減少の傾向は顯はれて來ない。

然るに賃金切り下げの爲めの組織的運動が、此時に開始せられた。雇主同盟は二つの理由により値下げを主張して居る。其一是、生活費が低下の傾向を示し來つた、と云ふにある。其二是、大陸と競争するが爲めには——事業の繼續に必要なだけの注文を得るが爲めには——生産費を低減せしむる必要がある、と云ふにある。此等の論點に對して、労働者團體の首領連は反對して居る。クラインス (Rt. Hon. J. R. Clynes, M. P.) は労働組合に於ける寧ろ穩和派の代表的意見として、次の如く述べて居る。

「私は、一般賃金の引下げが物價の引下げを確實ならしむる目的を以てなさるゝのであるならば、労働者は必ずしも、その提議を無下に拒絶するものではない、と云ふに躊躇しない。或る個々の場合にありては、労働者と雇主と

の代表者間の協定によりて、賃金の引下を行つても差聞へはない。併し一般政策の問題としては、國民團體によりて、若しくは責任ある行政官によりて、行動せる團體は、賃金の引下げに同意すべきではない。……利潤と高き給料と高き賃金とを同時に引下げんとする結合的運動に對しては、寧ろ盛に論ぜらるべきである。」

彼の見解によれば、かゝる政策に關しては、完全なる權能を有する聯合產業會が最適任者であるとして居るらしい。

一九二〇年末に至る迄は、工業の利潤が多かつたのは疑なき所である。エコノミスト誌所載の、三百以上の大企業に關する各週損益計算によれば、一九二〇年の利潤は一九一九年に比して、平均三二・六%増加して居ることが現はれて居る。併し此數字には、不景氣の甚だしくなつたことも、工業利潤に對する課税の重きことも隠れて居る。

英吉利の労働者は、生活標準が戰前の狀態に

引下げらるゝことを承諾する迄には、一戦を試みるであらう。労働者の各階級の間には、戦前の富の分配は不當であつた、と云ふ信念が、廣く行き渡つて居る。恐らくは、尙、場當りの政策が行はれてこの信念を益々強からしむるであらう。炭坑に於ても、鐵道に於ても、賃金引下げの交渉は、恐らくは、何等かの形式に於ける國家管理を要求することゝなつて解決せらるゝであらう。現在の不景氣が失職と共にこの夏を経て尙繼續する曉には、賃金は引下げらるゝの外なく、之によりて、輸出品の代價を更に下落することを可能ならしむるであらう。その場合に至りては、雇主が労働組合と交渉するに方り、非常に淡泊公正なる態度をとり、利潤引下げを承諾するに非ざれば、産業上の重大なる騷動を惹起すに至るべきこと、殆ど確實である。若し不景氣が終るならば、——不景氣が繼續するか終るかには、敵國賠償問題の決定が重大なる關係を有つのであるが——賃金引下げの刻下の必要は避けられることゝなる。若し又そのと

きに至り、數ヶ月以内に、生活費が引續き低下すれば、賃金を調節して引下ぐるに最も都合が良くなるであらう。一九二一年の初めより、生活費が明かに低下し始めたことは、これに就ては只一つの都合よき事柄である。何人も戦時中の賃金は結局引下げらるべきものであると云ふに就いては疑ふものがないのだから。

賃金引下げ問題の背後には、國庫の問題が潜在して居る。國庫は流通公債と政府紙幣とを減縮せんが爲めに、あらゆる好機會を利用せんとして居る。併し、歳入出が如何に良く適合せる場合でも、國庫は通貨收縮に就いて決定的の力を有するものではない。物價の下落なるものは生産の増加によるか、輸入食料及び原料の代價の下落によるか、若しくは、海外の競争によりて利潤又は賃金或はその兩者の減少によるか、その何れかによらねば起らない。目下物價下落の傾向が見ゆるのは、此等の諸原因に由るのである。物價下落がどの程度迄進むか、それが特發的のものが、秩序的のものが、は今全く判明し

ないが、ともかく既に現實に下落し始めたは確である。通貨收縮政策に關しては、勞働組合の協定及び共力が非常に重要である。何となれば結局賃金が下落しなければ、國庫に於ても金本位制を十分に確立し得る程に物價が下落しないのだから。然るに賃金引下げ問題は甚だ面倒なもので、且つ失職問題も甚だ重大となつて居るから、現政府も金本位制を恢復するのは容易な業ではないことが分るであらう。勞働者中心の政府が次に顯れ來ることは明である。併し此處では豫想をば書かぬことにしやう。

本論起草の後、英政府は採炭業に對する財政管理の廢止を決定するの態度を決めた。目下の處、政府と炭坑主、坑夫との間に、協定を見出すべき交渉は、二つの理由により不調に終つた。其理由の一は、坑夫側は國民的基礎によつて賃金を定めること、並びに現行の如き國定標準を存在せしむること、を要求したことである。其二は、採炭業の利潤は全國を通じて一つの國家的聯合に之を收め、それによりて利益少き炭坑も

一般賃金率の支拂を可能ならしめ、且つ利潤に何等かの標準を設けることを強要したからである。坑夫側の要求は、最初は、産業組織の變化に關する一般的計劃を遂行せんとする希望より出たのではない。目下の處では、炭坑國有と云ふことが、その背景をなして居るのである。坑夫側の立場は、實際、採炭業に於ける莫大なる利潤に反對して居るのである。

近き中に何等かの協定が——多分それは妥協とならうが——成立しなければ、三角同盟の他の成員たる鐵道従事員及び運輸勞働者の罷工が續いて起るかも知れぬ。三角同盟の罷工が起れば、英吉利の産業は幾許もなくして活動を停止せらるゝであらう。政府に於ては危急狀態の處置をなす以上に爲すべき所があらねばならぬ。かゝる罷工が起らば、何れの當事者も、勝利によりて直接に得べき利益よりも、寧ろ大なる損害を受くべき地位に立ち至るであらう。而も其結果としては、直接の利益も生ずるとは考へられない。併し同盟の罷工は起るかも知れない。若

し果して起らば、その最小の結果だけを見ても英吉利産業の恢復を、數週又は數月にして顛覆せしむることゝなるだらう。その影響の及ぶ所を考ふれば、更に極めて重大である。

危急存亡の秋には、豫見し得ざる企てや力が往々顯はれ來る。而して元の目的は變つて仕舞ふこともある。併し、英人大多數の習性は、事實の真相を探求し、事實によりて行動の方針を定めんとするにあるが上に現在の産業組織は一朝にして顛覆し終るものでないと云ふ感念が、根深く存在して居るから、結局は妥協の方法が見出されるものと思はれる。(一〇、八、二五、譯)